



植村正久研究を課題として

著者	吉馴 明子
雑誌名	あんげろす : 明治学院大学キリスト教研究所ニューズレター
号	41
ページ	4
発行年	2006-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10723/390



「植村正久研究を課題として」

吉剛 明子

あれは多分1992年のことだったのであろう、新設の政治学科で私は政治思想史2を担当することになった。ご紹介下さった政治思想史1担当の渋谷先生は、政治学会の分科会で司会を務めてくださった事が、若くして世を去った溝口潔さんの植村正久論の発表があったのはその時だった。私は海老名弾正の研究家ということになってはいたし、京極純一の『植村正久』は難解でとても手が届きそうにないように思えた。それでも、本当はいつか植村正久をやりたいと心の底のどこかで考えていた。

というのも、私の母の実家は大垣にあり、長老教会ミッションが建てた岡崎中学を卒業した祖父は、曾祖父の時代から日本基督教会大垣教会の信徒であった。東京女子大の佐波文庫にある植村正久全集購入申込者リストにはこの祖父母の名も記されている。また、母は神戸YWCAの委員で日本YWCA総会の代議員を務めたこともあり、母から植村環牧師の父植村正久についての話を聞かされる事もあって、偉そうな人だなあと思っていた。この母に連れられて、私は神戸にある日本基督改革派の神港教会で育った。ちなみに牧師であった田中剛二は明治学院から分かれた神戸中央神学校の卒業生である。

国際基督教大学在学中に、全共闘運動のはしりともいべき大学紛争に巻き込まれた私は、信仰と政治、キリスト者と戦争責任・天皇制について考えるようになり、丸山真男の「超国家主義の論理と心理」にあこがれて、我と我が身を省みもせず日本政治思想史を学び始めたのである。神の歴史支配の信仰が戦争を肯定したのではないかと

思ったこともあって、教会放浪もした。おかげで、教団の教会、(新)日本基督教会を知ることにもなった。キリスト教世界での植村正久評は、(お弟子さんと呼ばれる人以外では) そう好くもないということも知った。ずいぶん強引なところがあったようである。しかし、改革派教会という教義のしっかりした教会で育ったからか、私には海老名弾正より植村正久の方に親近感が持てたのも事実である。内村不敬事件での声明や評論を見ると、日本社会の状況や問題点の把握、運動の展開の仕方など、やはり植村はすごいと思ってしまう。強引というのは、的をはずさないやり手ということでもある。的にされた人間はたまったものではないが、なぜそこに的を絞って戦おうとしたかを考えるのは、まさしく政治思想史研究者の課題だと気負って考えている今日この頃なのである。半年の研究休暇の時を植村正久とゆかりの深い明治学院で過ごすことができるのはとても幸せだと感謝している。どうぞよろしく。

(よしなれ あきこ 協力研究員)